



長く続いた閉塞状況を打破し、日本が再び輝きを取り戻すために、日本文化の力を自らのものとし、国の力につなげていくことの必要性が高まっている。日本の伝統や歴史・文化を見直し、継承していくことは、日本人のアイデンティティの再確認を促し、国際社会で活躍できる人材の育成にもつながる。今年、伊勢の神宮では、二〇年に一度の式年遷宮が行われている。遷宮を通じて伝統や文化を守り続ける伊勢神宮の思いを伺いながら、日本の歴史文化を内外に伝えるプロジェクトを進める「歴史街道」の意義を踏まえ、次代を担う若者たちに何を伝え、日本人として国際社会においてどう振る舞うべきかについて考える。

積み重ねる努力の先に遷宮がある

山口 伊勢神宮では、今、二〇年に一度の「式年遷宮」が行われていますね。

鷹司 十月に行われる「遷御の儀」をもってクライマックスを迎えます。二〇〇四(平成十六)年四月の天皇陛下によるご聴許に始まり、足かけ八年の神宮最大の祭典です。遷宮の歴史は一三〇〇年といわれていて、大和朝廷、つまり律令国家が成立するころから続いています。天武・持統天皇の時代、天皇陛下が元首として祭り(まうりごと)と政(まつりごと)を行っていた時代から続く祭祀です。

遷宮にあたっては、大きく分けて三つの方向からご準備を進めています。

一つ目は、三〇以上に上る諸祭・諸行事を執り行うことで、両正宮(皇大神宮と豊受大神宮)と二四ある別宮を含めると二〇一五年の三月に完了します。

二つ目は、大御神をお遷しするためのご社殿を新築することです。ご社殿だけでなく、大御神の身の回りの御料、御装束神宝等すべてを新しくしますので、そういったものづくりにかかる準備があります。

三つ目は、行事を運営するにあたって、ご浄財を集めることです。戦後、神宮はGHQ(連合国軍最高司令官総司令部)の神道指令のもと宗教法人となり、いわば官から民に移行しました。したがって、国が国費で行ってき

た遷宮を神宮が代行するかたちとなり、全国(企業・団体・個人)から奉賛をいただいています。そうした募財活動も重要な要素となっています。

山口 八年にわたる準備期間には、相当なご苦労があったのではないですか。

鷹司 七年前に財団法人伊勢神宮式年遷宮奉賛会が立ち上がり、募財活動がスタートしました。リーマンショックや東日本大震災など想定外の出来事が相次いで起こり心配しましたが、予定よりも一年早く目標を達成できました。非常に心強く、まずもお力添えをいただいた皆様に厚く御礼申し上げます。殿舎・ご造営、御装束神宝の調進も万端滞りなく、このうえは、神宮職員一丸となって遷御の儀を見事麗しくご奉仕させていただきます。

遷宮の歴史を振り返ると、さまざまな時代状況のなかで、精一杯の努力をすることによって、現代まで継続することができたのだと感じます。

例えば、応仁の乱に始まる戦国時代には、約一二〇年間、中断や延期がありました。仮遷宮しかできなかったこともあったようです。また、終戦直後の一九四九(昭和二十四)年の遷宮の場合は、当時の国民の状況に鑑みて、昭和天皇が無期延期をご決断されましたが、国民からの再興を望む声が強く、サンフランシスコ講和条約発効後の一九五三(昭和二十八)年に実現しました。

対談 鷹司尚武(神宮大宮司) × 山口昌紀(歴史街道推進協議会会長)

グローバル化のなかで日本文化・精神をいかに継承していくか

—伊勢神宮式年遷宮に込めた思いと「歴史街道」の今日的意義

私は、ベストエフォート、すなわち、限られた条件のもとで最善の努力をすることを神宮はこれまで大事にしてきた、現在も大事にしていると思っています。難しい局面であっても、あきらめずに、今できるベストのことを確実にやっていくこと、それが次につながるのだと思います。

山口 鷹司大宮司は、「変わり続けているから変わらない」とおっしゃっていますね。

鷹司 例えば、ご社殿のお建て替えや御装束神宝の調進について、二〇年前と寸分も変えてはいけないということであれば、素材や匠の技にも移ろいがあり、続けることはできません。固定的に考えるのではなく、その時にできるベストは何かを見だし、多少変わっても、継続させることを第一に考えることが大事です。それによって、逆に、原点の部分には変わらずに守られるのです。目に見えない部分、五穀豊穡、国家・国民の幸せを祈る心そのものは、一三〇〇年たっても変わりません。今なお生きているのです。

山口 私は、日本人の常に若々しく元気でありたいという思い、すなわち「常若」の精神を遷宮に託しているのだと考えています。鷹司大宮司のおっしゃるとおり、形は変わっていくけれど、新しいご社殿をおつくりし、新しい心で神様をお迎えする。お祀りする天照大御神に、いつも若々しく元気であっていただくことが、私たち民族の幸福につなが

鷹司尚武

たかつかさ なおたけ



1945年東京都生まれ。旧姓松平尚武。五摂家の一つ鷹司家を継ぎ、27代目当主。先の神宮祭主・鷹司和子(昭和天皇第三皇女)の養嗣子。2003年NEC通信システム社長就任、2007年6月退任。天皇陛下の御裁可を仰ぎ、同年7月、戦後9人目となる神宮大宮司に就任した

ては、その後、大宮司の裁量で漸次建て替えていきます。

このように式年遷宮は神宮にとって最大の祭典であります。祭典の祭典であり、私には、神様にお食事を差し上げる「日別朝夕大御饗祭」にあると思っております。この神事だけは、戦国時代も戦時中の空襲があつた時も一五〇〇年間、一日たりとも絶やしたことはありませんでした。これが原点であり、基礎があるのであれば、遷宮のような大きな行事も執り行うことができるわけですね。先人たちが積み重ねてきた不断の努力に、ただただ敬意を表するばかりです。

受け継がれてきた日本の文化・精神

山口 私が大学で受けた、忘れられない講義があります。確か先生は、こういうことをおっしゃいました。「われわれのご先祖様は、この国で二〇〇〇回の米づくりを行って、現在に至る。その二〇〇〇回の米づくりの間に、日本の文化が育まれた。これを忘れてはなら

ない」と。私は、まさにそのとおりだと思います。多くの人が協力して初めて成立する米づくりを営々と続けるなかで育まれた精神が、「自然や他人との協調」「助け合い」「粘り強く続けること」というかたちで、日本人に結実したのではないのでしょうか。これは、西洋の狩猟民族の文化とは対照的です。田に水を引くには高度な土木技術が必要で、村総出でやらなければなりません。個人の意見でなく集団の意見が優先します。まさに、聖徳太子の「和を以て貴しと為す」という精神です。

また、古代の日本はアジアの最果ての地であり、さまざまな民族が流れ込んできました。それぞれの部族が神様を持っており、部族同士の争いもあつたでしょう。しかし、最終的には互いの神様を認め合い、それが八百万の神となりました。話し合いによって、互いの価値観を認め合うような精神が、日本文化の根底にあると思うのです。

人間を自然の一部と考えることも、日本文化の特徴だといえます。日本列島には四季があり、農耕民族として自然と一体となって暮らしてきました。西洋のように自然を征服するという文化ではありません。例えば、生け花のような床の間に花を生ける文化は、自然を家のなかに持ち込んで愛でる行為の現れなのだと思います。自然を敬い、隣人と協力し

て、共同で米をつくる。これが日本文化の原点ではないでしょうか。

鷹司 伊勢に神宮が建てられた経緯を考えると、山口会長のおっしゃることが、よくわかります。

日本書紀によれば、天孫・邇邇尊の降臨に際し、天照大御神は三種の神器と一握りの稲穂をお授けになりました。神器の一つが神宮のご神体である八咫鏡です。八咫鏡は、初代の神武天皇に受け継がれ、代々の天皇が宮中奥深く、自ら祀られていました。ところが、

一〇代の崇神天皇の御代に、同じ御床で寝起きするのは畏れ多いと別殿に奉斎されました。さらに、一二代垂仁天皇は皇女・倭姫命をお出しなさいました。そして、最後に伊勢に落ち着かれたわけですね。

宮中の奥深くに祀られていたご神体を外へお出しすることによって、国中にその存在を知らしめ、天照大御神は、八百万の神の頂点に立つことができました。同時に、この倭姫命の旅は稲作を伝授し、文化を伝播する旅でもありました。山口会長のおっしゃる米づくりが信仰とともに広まっていったということですね。

天照大御神は、氏族の長が祀る神々の上に立つ神様です。伊勢の末社・所管社は、ほとんどがそれぞれ土地の神様ですが、そうした神々を征服したのではなく、認め合い、譲り合いながら治めていきました。それが日本神道の特色であり、日本文化の特色ともいえるのではないのでしょうか。

山口 いじめや体罰などを例にあげて、そうした

日本人の価値観、美徳が失われつつあるという声を聞きます。しかし、私は、個人的には、それほど心配していません。日本人のDNAのなかに、確固とした文化、道徳が受け継がれていると信じています。大きく変わったのは生活様式です。核家族化が進行し、村社会、共同体の精神を教える場が少なくなってしまうことが、日本人の心のなから文化や道徳が失われてしまったわけではありません。

東日本大震災では、日本人のモラルの高さ、助け合いの精神が再確認されました。海外からも賞賛されましたが、困ったときの助け合いは、私たち日本人にとって、ごく当たり前の行為です。安倍首相は、美しい、強い日本を取り戻すとおっしゃって、教育改革を進めています。日本人の美徳が、戦後の教育のなかで軽視されていたことは間違いないと思えますが、日本人の心そのものは、それほど変わっていないし、大震災を一つの契機としてもう一度見直されるだろうと思っています。

鷹司 私も心配していません。要は、どれぐらいいのズパンで物事を考えるか、ということですね。

神宮の森は豊かな緑に溢れていますが、実は、一〇〇年前には半分ぐらいがはげ山だったのです。江戸時代に「お伊勢参り」が流行し、当時の人口の約一〇分の一が伊勢に押し寄せました。彼らが宿泊するのに、食事を



山口昌紀

歴史街道推進協議会会長
近畿日本鉄道会長
やまぐち まさひのり

1936年生まれ。奈良県出身。2003年近畿日本鉄道社長就任、2007年から会長。1996年に神職の資格を取得。2007年から歴史街道推進協議会の会長を務めている



歴史街道 (<http://www.rekishikaido.gr.jp>)
 わが国を代表する数多くの歴史文化資源をわかりやすく紹介していくため、5つの時代別ゾーンを結ぶメインルート(伊勢～飛鳥～奈良～京都～大阪～神戸)と、地域の特徴を活かした3つのネットワークを設定。このような時空をガイドするルートやエリアにおいて、地域の特徴を活かしたまちづくり、歴史文化資源の保全・継承を推進することにより、近畿の豊富な歴史文化資源を、現場で実感をもって体感してもらいたいと考えている

の時代も、為政者にとつて政の中心であったということでしょう。神宮を運営する仕組みは、戦争を経て、官から民に変わりました。しかし、遷宮の心は変わらないのです。また、技に関するいはば、確かに技術的には変わりましたが、手おのが電動ノコギリになっても、自分がいまつくることができる最高のもの

長いスパンで考えて 次の世代に引き継ぐ
 山口 日本人の自然を愛する精神、神を敬う精神は、世界に通じるものだと思うのですが、いかがでしょうか。
 鷹司 神宮の大宮司を務めるようになってから、各国大使など海外の要人の参拝を受けることがたびたびありました。彼らのなかには、もともと神道を世界にアピールすべきだと言う人もいます。私は、普遍性については大いに研究すべきだが、言挙げしないのが日本の神道の精髓だとお答えすることにしています。



皇大神宮別宮・倭姫宮



神宮神田

提供：神宮司庁

くったり、風呂を沸かしたりするために、大量の木材が消費されました。

そこで、大正時代に、二〇〇年計画で植林を始めたのです。二〇〇年後にはこの山から採れた御用材を用いて遷宮をできるよう、当時の科学の粋を集めて行われた大事業でした。それから一〇〇年たって、うれしいことに、今度の遷宮では、二割程度の御用材を賄うことができました。

時代によってさまざまな困難があると思いますが、長いスパンで解決策を考えることも大切です。失われつつある日本文化、精神を取り戻すには、五年や一〇年では難しいかもしれません。しかし、夢を持って一〇〇年、二〇〇年というスパンで考えるならば、必ず取り戻すことができるかと楽観的に考えています。

を紹介、その後、現地を訪問して、学んだことを実感してもらおうというプログラムで、すでに一〇〇〇人以上のビジネスパーソンが受講しています。

日本の研修参加者には、あらためて日本文化への理解を深め日本人としての誇りと自信、精神的な支柱を取り戻してほしいとの願いを込めています。海外からの研修参加者には日本の歴史文化的な背景の理解を深めてもらい、自国の産業育成にいかに応用できるかを考えることで研修成果の向上につながることを目指しています。それが文化交流、国際的な相互理解にも通じていくと考えています。

受講者からは、「日本の伝統的な技術だけでなく、それを支える心、精神の部分が理解

山口 私が常々申しあげているのは、経済が疲弊し、危機に陥った国でも、民族の誇りと文化を持ち続ける限り滅びることはないということなんです。文化を維持する媒体は人間そのものです。日本文化をいかに守っていくかは、私たちにとっては死活問題です。

日本語は仲間内の言葉、関係者の言葉ですから、主語がないといわれます。お互いに顔を見ればわかる、「私」を言挙げする必要のない文化です。

鷹司大宮司の植林のお話で思い出しましたが、以前、古都飛鳥保存財団の勉強会で、高句麗の広開土王碑を見に行ったことがあります。中国の長春から鉄道で鴨緑江まで行きました。その時、長春を離れると、日本の里山をほうふつさせる風景が広がっていました。私が「日本とまったく同じだ」とつぶやくと、

「鷹司 遷宮に関しても、技と心が重要だといわれます。その心とは何かといえは、大宮司が奏上する祝詞のなかに表れています。祝詞の内容を要約すれば、皇室・国家・国民の安寧を願うということに尽きます。祝詞は、宣命体という大和言葉を漢字で記した文体で残されていますが、これは奈良時代初頭には確立していました。つまり、遷宮が始まった時代から、その内容は変わっていないことになりました。

天皇家が政治と祭祀の中心であった奈良時代から、平安時代には貴族が中心となり、その後は武家が台頭するというように、為政者は変わっていききましたが、祝詞の内容は少しも変わっていません。平たくいえば「民安かれ、国安かれ」が、いつ

の時代も、為政者にとつて政の中心であったということでしょう。神宮を運営する仕組みは、戦争を経て、官から民に変わりました。しかし、遷宮の心は変わらないのです。また、技に関するいはば、確かに技術的には変わりましたが、手おのが電動ノコギリになっても、自分がいまつくることができる最高のもの

技を支える日本人の心を学ぶ

山口 私が会長を務めている歴史街道推進協議会は、「世界を考える京都座会(座長松下幸之助、まとめ役は堺屋太一)」が一九八八年三月に発表した「歴史街道づくりの提言」を受け、一九九二(平成三)年四月に官民六二団体で発足(二〇一三(平成二五)年現在二〇二二団体)した公益文化事業を推進する団体です。近畿圏に集中する歴史文化資源を活用して、日本文化の本質を内外に伝えていくためのさまざまなプロジェクトを行っています。三年前からは、グローバルに活躍するビジネスパーソンを対象に、「日本文化体感プログラム」を始めました。これは、座学によって日本が誇る「たくみ・ふるまい・もてなし」の心を学び、文化力を先進技術に活かす「技」

ので大御神に奉仕申しあげるといいう、職人の気持ち・こだわりに変化はありません。技と心という、非常に抽象的に聞こえますが、その根幹は、一三〇〇年の間、ぶれていないのです。
 山口 おっしゃるとおりです。文化の根底は、飛鳥・奈良時代から変わっていないと思います。一方で、日本文化は外来の文化を吸収し、融合しながら進化してきたという側面がありますね。
 鷹司 新しい技術を取り入れないで固定化してしまつたら、形を保ち続けることすらできません。奈良時代には和魂漢才、明治になると和魂洋才と言っていたように、和魂の部分に変えてはいけませんが、才については大いに柔軟であつてほしいものです。

山口 なるほど、それが日本の文化だともいえますね。日本人は、言い訳・弁明しない、言挙げをしないことを美德としています。日本人の作法です。特に、神職は決して言い訳をしません。

鷹司 神職が言挙げしなくても、今は、メディアやネットがさまざまなかたちで取り上げてくれますし、駅にはポスターが貼られています。そのおかげで裾野は広がっていると感じています。例えば、近畿日本鉄道が、観光



のなかに神宮をとらえることも自然な流れです。神職が「観光、観光」と言うわけにはいきませんが、もちろん、神宮としても適切な広報活動は行っています。それぞれの持ち場で、広めていただければいいと思います。ただ、グローバルな発信が十分であるかどうかは、また別に考える必要があるでしょう。

山口 日本文化の根底には、地球を差配する見えない力とご先祖様に対する信仰があります。これは、人類普遍の価値観です。日本人にそれがあふことは、世界にアピールすべきでしょう。

とはいえ、本当に良いものは、言挙げしなくても自然と伝わるのかもしれない。以前、中国の迎賓館で食事をした際、その料理長と話をしました。東京で五年間、料理の修業をしたその料理長は、日本の料理は、食器の美しさも含め、生け花のように自然を活かした芸術品だと言っていました。

鷹司 神宮も、最近では、若い人がたくさん参拝してくれるようになりました。伊勢はパワースポットだというのが一つの理由のようです。なかには誰を祀っているのかさえ知らない人もいますが、実際にここを訪れると、とても気持ちの良い所だと感じてくれます。私はそれでいいと思っています。天照大御神のご存在そのものが、皆さんがいつ来ても気持ちの良い所に自然とつながっていくのでしょう。

山口 若い人が伊勢神宮を訪れることは、グローバル化のなかで、日本とは何か、日本人とは何かを考える、良い機会になります。それは、原点に返るということです。遷宮は一つのイベントかもしれませんが、日本の歴史そのものが包含されているので、歴史を振り返る良いチャンスだと思っております。

国際社会で活躍するビジネスパーソンの人ひとりが日本文化を理解し伝道師の役割を果たせば、経済活動だけではなく、もっと深いところで、各国と結び付くことができるのではないのでしょうか。当協議会の意義はここにあります。歴史の現場に足を運んでもらい、日本の歴史・文化の力をより多くの内外の方にお伝えできるように、これからも取り組みを続けていきたいと思っております。

鷹司 神宮の式年遷宮一三〇〇年の歴史は、決して平坦なものではなく、存続が危ぶまれる事態もありました。いつか誰かがあきらめていたら、今日、神宮は残っていません。継続は力なり、日々の積み重ねが大切なのです。

日本の文化・精神は、日本語とともに長い歴史のなかで守り、育まれてきたものです。すぐに結果を求めるのではなく、一〇〇年、二〇〇年の長いスパンで考え、決してあきらめず、そのときできるベストで次の世代に引き継いでいくことが大切だと思います。

(二〇一三年八月六日 神宮司庁にて)